

# 書字が苦手な児童のひらがな指導 ～効果的な指導の一例として～

○盛 弓子<sup>①</sup>      北村 直子<sup>①</sup>      平井 理心<sup>②</sup>      坂尻 千恵<sup>③</sup>      小野村 哲<sup>①</sup>  
<1> NPO 法人リヴォルヴ学校教育研究所      <2>放送大学大学院      <3>筑波大学大学院

## 1 目的

当法人ではおもに不登校児童生徒を対象としたライズ学園の運営に取り組んでいる。一口で不登校とは言ってもその理由はさまざまであり、容易にその原因を特定できるものではない。しかしこれまでの実践から、読字や書字の困難がその背景にあることも少なくはないことを感じている。

第13回大会では、劣等感のためか鉛筆を持とうとさえしなかったA児への支援を通じて、楽しみながらかつ効果的な練習方法の開発過程を報告した。今大会ではその成果として完成させた「ひらがなれんしゅうちょう」を用いた書字指導の一例を提案する。

## 2 ひらがなれんしゅうちょうの概要

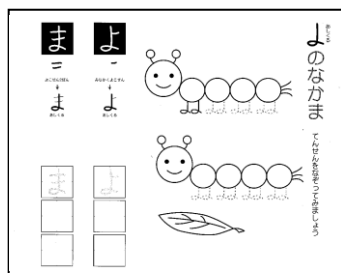
### (1) 「ひらがなれんしゅうちょう」作成のきっかけ

考えてみれば、文字を識別し、文として理解するという事は非常に高度な行為である。「さ」は「さ」と続けて綴ってもよいが「う」を同じように続けて綴ればこれだけでは識別が困難になる。しかし町中を歩けば「うなぎ」の「う」などは見ようによっては「ら」や数字の「3」のように読めるものもある。しかし私達はそれに続く「なぎ」という文字から、または店先から漂う蒲焼きの香ばしいにおいから、そこに「うなぎ」と綴られていることを理解する。

一方で、書字や読字に困難を示す子ども達が置かれている状態は、例えばカレハバツタやハナカマキリが見事に自然の中にとけ込み、私達の感覚受容器に届いているはずだが認知できない状態に似たものではないかと推測される。この他にも認知学習理論では、手書きのくずし文字でも読めることの説明として「プロトタイプ」や「作動記憶」の存在をあげている。特に書字に困難を示す場合は、この「プロトタイプ」の形成につまずきの一因があるのではないかという仮説から、私達の研究はスタートした。

### (2) 「ひらがなれんしゅうちょう」の特長

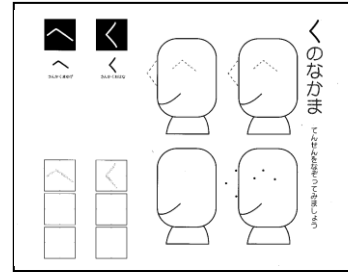
- ① 類似したパーツごとに文字をグルーピングした
- ② 類似部分に名前をつけ、文字形を言葉で説明できるようにした
- ③ 絵の中にパーツを入れ込み、方向性や形を印象づけられるようにした
- ④ 「い」は「」というように、まずは文字の形をとらえた上で、より整った文字に近づけるようにした。



<図1> 「あしくる」

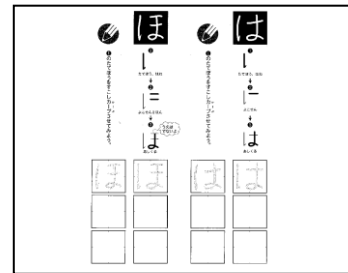
①、②はプロトタイプの形成をねらったものである。「よ、ま、は、ほ」などは「あしくる」の仲間としてその基本形を意識させ、文字が想起できない場合には、この基本形を示すなどした。しかしこれだけだと、書き順を無視して基本形から書き始めてしまう、またはそれによって余計に文字のバランスが崩れることが予想された。そこで、「みじかくよこせん、あしくる」<図1>と音声情報により書き順、文字形を説明するようになった。

③は記号の認知に困難を示す子に対して、絵の中でその基本形を理解させようとしたものであり、同時に鏡文字を防ぐために、絵に方向性を持たせるように努めた。鏡文字を完全に防ぐことは難しいが、迷ったときには「お顔はどっちを向いていたっけ？」<図2>などと声掛けを続けている。



<図2> 「とんがり」

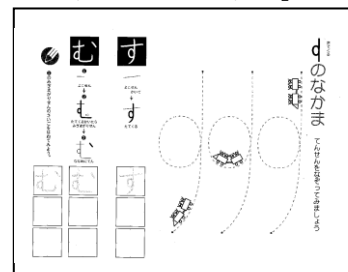
④では形を単純化することで、プロトタイプ形成を支援することをねらったものである。文字の形がとらえられるようになった児童には、「まっすぐの二本棒を少し膨らませるとかっよくなるよ」<図3>などと助言している。



<図3> 「ステップ」

### (3) その他の練習方法

点線部分をなぞるといふ練習方法に代えて、次に白抜き文字を使う練習を取り入れた。子ども達にとって細い点線部分をなぞることは困難であり、正確になぞろうとすることで必要以上に力が入ってしまったり、几帳面な子だとうまくなぞれないということで練習が嫌になってしまうこともある。白抜き文字をなぞる練習には、多少はみ出しても目立たないという利点がある。「はね」の部分などは、力まずに自然な筆の流れを意識させるという効果も期待できる。



<図4> 「たてくる」

また、思うように字形が整えられない場合には、「よこせん、たてくる」と言いながら、指で宙に文字を書く方法も推奨している。いきなり鉛筆を持たせると、「す」は「 」と「 」を別々に書いて組み合わせるといふ不自然な書き方になることもある。そこで<図4>「たてくる」のようにローラーコースターの動きを意識させながら宙に書いて練習することで筆の運びがスムーズになるという効果が期待できる。

## 3 考察

ひらがなを読んだり書いたりできるようになった子ども達が、「できるようになったよ」と胸を張る姿を見ていると、それはただ文字を覚えるということ以上に、その成長に深い意味を持っていることを再確認させられる。「ひらがなが読めない」「書けない」という劣等感から、児童がすべてにおいて自信や意欲を喪失してしまうことだけは避けたいものである。しかし具体的な支援となると小学校入学後に困難が具体化してから、またはその困難が認識されないままに放置されてしまうことも未だ少なくはない。

これまでの取り組みについては、その成果を具体的に検証するには至っていない。しかし実際に私達が指導をした児童以外にも、練習帳の利用者からは「今まで書くことを拒否していた子が、あっという間に一冊すべてを終わらせ、なんとか書けるようになった」などの声が寄せられている。おそらくは、綿あめ機の中に割り箸が差し込まれたのと同様に、混沌としていた状態に文字の基本形という意識を確立したことが、習得を推進したものではないかと推測している。

私達は今後この指導法に改善を重ね、文字の認知というレベルから単語、さらには文章を理解するという段階における支援方法についても研究を進めたいと考えている。